

「ツルツルした氷」から「ザラザラした大地」へ  
— 『論理哲学論考』を離れ『哲学的探求』に潜在する語り得ない

もの<sup>1</sup>

溝越 大秦

序

本稿は、ヴィトゲンシュタイン著『哲学的探求』<sup>2</sup>（以下、『探求』）の意義を従来よりさらに明確にする手段の確立を試みる。『探求』は、「語りえないもの」に対する沈黙という立場をとる『論理哲学論考』<sup>3</sup>（以下、『論考』）を乗り越えるところに意義を見出せる。そこで本稿は、『論考』を『探求』がどのようにして、どれほど乗り越えているかについて、従来の立場の不十分な点を補完する新たな観点から論じる。新たな観点とは、「語りえないもの」が『探求』においていかに扱われうるか、である。

従来の立場は以下のように議論を進める。すなわち、『論考』における言語は記号として事態を表現する命題の総計であり<sup>4</sup>、命題の意義は命題が表す事態、つまり内容である<sup>5</sup>。しかし、『探求』においては語が言語ゲームの中で行為とともに使用されることにより文<sup>6</sup>が役割として意義を持つことが指摘される<sup>7</sup>。『探求』においては言語ゲームという概念が語を使用する場面を叙述する道具となり<sup>8</sup>、『論考』の言語観よりも多様な意味が語に与えられることにより言語観が拡張され、『論考』を『探求』が乗り越える<sup>9</sup>。以上のような議論である。たしかに、有意義な命題が言語の全てをカバーできていないことを言語ゲームの観点により提示することが『論考』の乗り越えには必要であろう。

しかし、従来の立場は十分ではない。なぜなら、『論考』のキーワードである「語りえないもの」が『探求』で登場しないため、「語り得ないもの」という観点から『論考』を『探求』がどのようにして乗り越えているかが不明であ

るといふ点に、従来の立場は言及していないからである。くわえて、『論考』の不十分な点を「言語ゲーム(Sprachspiel)」の不足と指摘するのみでは、「有意義な命題の総計」へ「言語ゲーム」という新しい考察様式が追加されるだけであり、『論考』を『探求』がどれほど乗り越えているかが明らかにされえないのである。これでは、『探求』の意義で不明瞭な点が残るままであろう。

やはり、『論考』を乗り越えるには、『論考』における「語りえないもの」が『探求』の言語観ではどのように登場しうるかを検討する必要がある。そうすれば、『論考』を『探求』がどのようにして乗り越えているかが明らかになる。さらに『探求』においては何が「語りえない」のかを検討することで、『論考』を『探求』がどれほど乗り越えているかが明らかになるであろう。

本稿の議論は以下のように進行する。まず『論考』における「語りえないもの」を『論考』のテキストから読み解き『論考』において何かを語るものは有意義な命題であると指摘する。そして有意義な命題でなければ、何も語らず、語りえないものは有意義でないもので示されることを指摘する。本稿は有意義でないもの、無意義とナンセンスを取り上げ、それらが語りえないものとうどう関わるのかを論じる。

しかし、我々の実際の言語は有意義な命題のみで成立しているのか。例えば、「おはよう」と言われてなぜ人は数ある有意義な命題があるのにも関わらず、「おはよう」と返すことを選んでしまうのかという問いが立てられるはずである。しかし、現実との対応関係の中で意義を持つ命題という観点からは、考察を進められない「ツルツルした氷の上」(『探求』第107節)に迷い込む。ここで考察を進める「摩擦が必要である」ために、「ザラザラした大地へ戻れ!」(『探求』第107節)とヴィトゲンシュタインは言う。その観点から、『探求』において、言語は当事者の行為と共に構成される言語ゲームの観点から考察される。そして行為と共に言語ゲームを構成することが『探求』において何かを語ることになる。

したがって、『探求』で『論考』における「語りえないもの」がいかに関与するかの問いは、『論考』において有意義でないものが行為と共に言語ゲームをいかにして成立させるか、という問いになる。これにより、『論考』を『探求』がどのようにして乗り越えているかが示される。さらに、どのようなものが『探求』で語りえないか、つまりどのようなものが行為と共に言語ゲームを成立させないかを検討することで、『論考』を『探求』が乗り越えていないところが明らかになり、どれほど乗り越えているかが示されるであろう。本稿は、これらの問いに対して具体的な解答を与えるまでには至らないが、最後に課題として取り組むべきことを挙げる。

## 1. 『論考』の言語観

### 1.1 有意義な命題の総計としての言語

「語りえないもの」について論じる準備として、『論考』の言語観を精査する。ヴィトゲンシュタインは言語について「命題の総計が言語である」（『論考』四・〇〇一）と立場を端的に述べる。これは即ち、命題が言語の要素であり、命題全てを集めたものが言語であるという観点に基づく見解である。ヴィトゲンシュタインはここから、命題がどのようなものであるかを論じることで、命題が何をどこまで語りうるかを分析することで言語が何かを語りうる限界を画定しようとするのである。

そこで「命題は現実の像である」（『論考』四・〇一）という立場が取られる。『論考』における現実とは、「事態の存立非存立」（『論考』二・〇六）である。あるものが現実の像であるとは、「事態の存立非存立を、表出する」（『論考』二・一一）ということである。例として、地図が挙げられる。地図において、地図記号は実際の物とは全く異なる形ではあるものの、さまざまな施設などを表す。なおかつ記号の配置により所在地をも、曲線で表された道や山、平

野などの中でどこにあるかを示す。

つまり像は「これが真であれば、かような事態が成立している」という形で意義を持つ。先の例で言えば、まず地図記号やインクの線で表された道、山のような要素が現実の対象を指示する。次に、要素が「特定の様式で相互に関わりあうこと（『論考』二・一四）により、その地点における施設や事物の位置」がかくあるという事態と地図との間に写像の関係が成立する。このようにして、記号などの要素とその配列が真である場合地図は描かれた通りの配置であるという意義を持ち、主張するのである。

そして、その対応関係が成立するには「論理形式」が必要である。以下の引用の通りである。

およそ像が現実を-正しくであれ誤ってであれ-写像しうるために、いかなる形式のものであれ、いずれの像も現実と共有せねばならないものが、論理形式である、即ち現実の形式である。（『論考』二・一八）

現実の形式、つまり事態の存立非存立の形式が像と現実の間で共有されている。そのため、現実と像に「写像している関係(abbildende Beziehung)」が成り立ち、命題は意義を持つ。

像である命題は現実と論理形式を共有することにより、有意義(sinnvoll)である。例えば、「今日の天気は雨である」という命題は昨日や明日ではなく今日の天気が晴れでも曇りでもなく雨である事態を表す。「今日」や「天気」、「雨」などの語という要素が「特定の様式で相互に関わりあうこと（『論考』二・一四）により、命題を構成して事態を表し何かを語るののである。そして命題の意義が現実で起こっていることを表す場合、命題は真である。反対に命題の意義が現実で起こっていることを表さなければ偽と判定される。

## 1.2 語りえないもの

有意義ならば真偽判定がなされる。つまり真偽判定されえないものは有意義ではなくなり、何も語らなくなる。有意義でないケースは二つある。無意義(sinnlos)<sup>10</sup>とナンセンス(unsinnig)<sup>11</sup>である。無意義は真あるいは偽にしかならないケースで生じる。前者は恒真式、後者は矛盾である(『論考』四・四六)<sup>12</sup>。恒真式は「雨は雨である」、矛盾は「雨は晴れである」というようなものである。ナンセンスは「道徳」や「美」など、語が指示する対象物を持たないケースで生じる。これらは、言語の機能を失い、限界に抵触しているか超えているものである。

無意義なものは、有意義ではなく何も語らなくとも、記号体系に属する(『論考』四・四六一)。すなわち、「雨は雨である」というような恒真式や「雨は晴れである」というような矛盾においても、「雨」や「晴れ」という語は他の有意義な命題を参照すれば指示するものが明らかになる。語の指示対象(Bedeutung)はその語を含む有意義な命題によって解明されるのである(『論考』三・二六三, 三・三)<sup>13</sup>。無意義は語が指示する対象はあれど、ただ命題としての機能つまり意義を持ち合わせていないのみというケースである。言語が有意義な命題によって何かを語る限界が恒真式や矛盾である。

一方、ナンセンスは無意義と違って記号体系に属さない。つまり語が指示対象を持たないのである。そのような場合、現実には起こっていることと対応関係を持たないため、その語を含む命題は真偽判定できない。すなわち、ナンセンスは、意義を持つことはおろか指示対象すら持たないため言語が意味を持つ限界を超えたところにある。かくして言語に引かれた限界を無視し、何かを語るうとすれば、「沈黙せねばならない(『論考』七)と提示される。

有意義な命題の総計が言語であり、真偽判定不可能であれば語りえない、という言語観が『論考』を貫徹する。言語が何かを語る限界と、限界の先に語りうるものはなく、哲学ができることは何もない。像理論と論理に基づくこの体

系は、有意義な命題を使用する限りにおいて反論できない。すなわち事態との対応関係において成立する命題の総計が言語であるならば、限界が定める範囲と、その先にある沈黙を破ることはできない。

### 1.3 『論考』では答えられないもの

しかし、『論考』で言語が全てカバーされる訳ではない。なぜなら、言語には「有意義な命題」という観点では説明できない言語形態も存在するからである。たとえば、(ヴィトゲンシュタインが挙げている例ではないが) AさんとBさんがいて、Aさんによる「おはよう」という挨拶においてBさんに求められることは、真偽判定ではなく「おはよう」などが例に挙げられる「返事」である。さらにAさんによる「煮立ってきたら火を止めてください」という命令において、Bさんは煮立った時に火を消す。ここにおいて、『論考』の提示するような言語だけを操る人間は「おはよう」と返事をしたり、火を止めたりしなければならないと命令することはないのである。

挨拶や命令には現実との対応以外に、『おはよう』と言われたのであれば、『おはよう』と返せ」ということを根拠づけるような、非常に複雑な「暗黙の取り決め」(『論考』四・〇〇二)が存在する。しかし『論考』は「取り決め」に目を向けない。以下の引用から、そのことは明らかになる。

日常言語から言語の論理を直接読み取るとは不可能である。

言語は思想に変装を施す。即ち、衣装の外的形式から装われた思想の形式を推論することはできない。なぜなら衣装の外的形式は肉体の形式を認識させるのとは全く別の目的に従って形作られているからである。

日常言語の理解のための暗黙の取り決めは非常に複雑である。(『論考』四・〇〇二)

『論考』は「外的形式」を取り巻く「暗黙の取り決め」に目を向け、観察することに力点を置かない。ヴィトゲンシュタインからすれば、有意義な命題と現実との間の論理形式が日常言語の「肉体の形式」であり、理解すべきものなのである。

しかし、挨拶における返事や、命令における要求の実現も、なぜそのような行動を取ってしまうのかという問いに応えるためには、命題と現実との対応関係以外に、「暗黙の取り決め」を成立させる人間的な事柄が関わっていなければならない。ところが、『論考』が視野に入れている言語は命題の総体であるため、命題以外の事柄を説明しない。ここで、『論考』は自身の言語観を改める必要がある。「暗黙の取り決め」を取り扱えるよう、言語を新しく捉えなければならぬ。それを遂行したのが『探求』である。

## 2. 「ツルツルした米」から「ザラザラした大地」へ

### 2.1 「ツルツルした米」

では、『探求』はどのようにして『論考』の言語観を批判し、乗り越えようとするのか。彼は『探求』において『論考』の立場が以下のようなものであると記す。

[...]論理[...]それは、あらゆる経験に先立っており：全経験に行き渡らなければならない。[...]言うなれば、最も純粋な結晶でなくてはならないのである。[...]（この思想は、『論考』5.5563 に於いて、述べられている。）  
（『探求』第97節）

『論考』5.5563 とは、以下の引用の通りである。

我々の日常言語のすべての命題は、事実それがあるがままで、論理的に完全に秩序づけられている<sup>14</sup>。

(我々の問題は抽象的ではなく、おそらくは存在するもののうちで最も具体的な問題である。) (『論考』五・五五六三)

上記で描かれる『論考』の成果は、「論理」があらわす「世界のアприオリな秩序」が言語のいたるところへと行き渡っているという思想にある。ところが、ヴィトゲンシュタインはこの立場を以下のように批判する。

我々が日常言語を詳細に観察すればするほど、日常言語と我々の要求の間の抗争は、ますます強くなる。(論理の結晶のようなこの純粹さは、確かに探求の結果私に与えられたものではなく、或る要求なのである。)  
(『探求』第107節)

この批判は、『論考』の結論として得られたもの、つまり「アприオリな秩序」が限定された要求からなるものであるせいで我々の日常言語と衝突することは免れない、というものである。

『論考』の要求から生じた結論と日常言語との衝突という点で、以下のような弊害が起こるとヴィトゲンシュタインは述べる。

我々は、摩擦のないツルツルした氷の上におり、したがって条件は、或る意味では、理想的なのであるが、しかし我々は当にその事故に、前に進む事も出来ないのである。(『探求』第107節)

今ある「氷の上」とは、現在まで依拠してきた立場、すなわち『論考』の言語観である。『探求』第107節において『論考』の言語観は「アприオリな秩序」



の要求からなると説明される。これは「ある意味理想的」な「摩擦のないツルツルした氷」であるが「前に進む事も出来ない」と表現される。しかし、どのようなところが「ある意味理想的」であるのか。「ツルツルした」、「前に進む事も出来ない」とはどのような状態のことを言うのか。

例えば、『探求』において例には挙げられていないが、挨拶の場合、「おはよう」と言われて「おはよう」以外にも「今は 11 時台だからおはようとは言えません」や「おはようございます」と返答することもあり得る。あるいは「今日 1 日で初めてお会いします」という隠語であるかもしれない。

たしかに「アприオリな秩序」は全経験に行き渡ってあらゆる事態の可能性を扱うことができる。命題は、可能な事態の存立非存立を表せば論理形式を現実と共有し、意義を持つ。そのため、命題が有意義である条件を明らかにし、有意義でないケースを精査すれば、言語の実体をスムーズに理解できる。これは「ある意味理想的」な条件である。

しかし、あらゆる可能性のうちどれに従えば良いのか、『論考』の立場では答えられないのである。有意義な命題は意義を伝達すれども『おはよう』という挨拶に『おはよう』と返せ」と伝達しないのである。伝達されないのであれば、「おはよう」の意味を考察する点においても、日常生活においても「前に進む事は出来ない」のである。

## 2.2 「ザラザラした大地」

「ツルツルした氷の上」にいるせいで「前に進むこともできない」状態から脱出するために、彼は次のように語る。

しかし我々は前に進みたい；そしてそのときは、我々には摩擦が必要なのである。かくして、私は言いたい；ザラザラした大地へ戻れ！（『探求』第107節）

「ツルツルした氷」という『論考』の立場に対し『探求』が基づく立場は「摩擦」のある「ザラザラした大地」と表される。「摩擦」は「ツルツルした」状態とは正反対のものであり、我々を前進させることができる。しかしどの点において「摩擦」があり、前進することができると言えるのであろうか。

人が「おはよう」と返せば「おはよう」と返す場合を再び想定してみよう。我々は考えられる他の解釈を退ける何かしらの原則のようなものを立てて「おはよう」と返すであろうか。そうではない。「道しるべは、疑いも残すこともあり、残さない事もある(『探求』第85節)と語られるように、我々が次に為すことにどのような解釈が考えられようと、「おはよう」と返すことは、返事をする人の目的を達成すれば、何も問題はないのである。

「おはよう」と返すこととの目的とは何か、という問いが生じるが、ここでは取り扱わない。重要なのは、我々が(年長者や初対面の人等に向けて話す場合を除外して)「おはよう」といわれて「おはよう」と返すことが何ら不自然なことではない、ということである。ここにおいて、「論理」というものが世界や人間を限定しているのではない<sup>15</sup>。むしろ考えられる解釈および選択肢を規定する論理を、「世界と人間の限界」が限定するのである<sup>16</sup>。

我々は「世界と人間の限界」という観点でようやく前進することができる。人間は矛盾なく行動し、考えうるあらゆる事態を実現する生き物であるか。そうではない。「考えられる事態のなかでなぜこのような行動をするのか」という疑問が必ず生じる。この疑問、矛盾を問題として扱わなければ、「おはよう」と言われて無数の可能性から「おはよう」と返すことを選ぶことに考察を進められない。いわば「摩擦のないツルツルした氷の上」に入り込む。すなわちザラザラした大地へ戻ること、摩擦を取り戻すことは、「人間という有機体」によって生じる疑問や矛盾を問題として扱うことである。

以上より、「摩擦」について、命題以外の事柄が言語と関わっていないことが分る。『探求』において、言語はもはや(『論考』で考えられ

ていたような)、考えられる事態総てを表す命題が記述された本ではなくなつた。言語とは命題だけでなく、周囲に存在する使い手の人間の諸要素と複雑に絡み合っているものなのである。それでは、『探求』は言語にどのような観点でアプローチするのであろうか。

### 3. 『探求』の言語観

#### 3.1 『探求』において何かを語ること

『探求』がどのような観点で言語にアプローチしているかは「言語とそれが織り込まれる行為の全体をも「言語ゲーム」と呼ぶであろう」(『探求』第7節)という言葉を通して明確になる。すなわちヴィトゲンシュタインは、人間がなす「行為」へと目を向け、言語を考察するのである。

たしかに、挨拶や命令などの日常言語は返答に代表されるような行為を伴う。他にも、字を書いたり、書かれた字を読んだり、計算したり、理解したりすることなど、人間は多くを行為し、そこには多くの疑問が生じうる。「なぜそのようなことをするのか」という問いの可能性がふんだんに含まれる土壌をヴィトゲンシュタインは「ザラザラした大地」と呼ぶのであろう。

以上のことからヴィトゲンシュタインが『論考』に対して抱いていた問題点と、『探求』で立脚する出発点が描かれる。ヴィトゲンシュタインは『探求』において、命題だけでなく挨拶や命令などの言語に織り込まれた行為を含めて「言語ゲーム」と呼び、言語と行為の関わりを分析していく立場をとる。

言語ゲームは言語だけでなく行為に焦点を当てた概念である。すなわち挨拶であるなら返答へ、命令であればその実行へ、目を向ける。例として、ヴィトゲンシュタインは以下の引用にある通り建築の場合を挙げる

A氏は石材を積んで家を建てている。石材には、台石、柱石、板石、梁石、がある。B氏はA氏に、A氏が必要とする順序で、石材を渡さなく

てはならない。この目的のために彼らは、「台石」、「柱石」、「板石」、「梁石」という四つの語で成り立つ言語を用いている。A氏はこれらの語のどれかを叫ぶ；B氏は、その叫びに答えて持って行く事を教わった石を、A氏の所に持って行くのである(『探求』第2節)

上の例は、4つの語のみで成り立っているわけではない。A氏の叫びとB氏が持っていくことがなければ存立しないのである。言語ゲームの中で語を使用すること、このことが『探求』における「語ること」であるであろう。

### 3.2 言語ゲームの多様性

人間の行為と言語がそこにある限り、言語ゲームは存在する。ヴィトゲンシュタインは以下のように述べる。

君は、言語ゲームの多様性を、以下の例やその他の例に於いて、思い浮かべてほしい：

命令を与える、命令に従って行動する

或る対象を、観察し、或いは、測定して、記述する

或る物を記述（設計図）に従って作る

出来事を報告する

事の成り行きを推測する

仮説を立て、検証する

実験の結果を表やグラフで表現する

物語を作り、それを読む

劇を演ずる

輪唱する

謎を解く \_\_

小話を作り、それを語る \_\_

計算の応用問題を解く \_\_

ある言語から別の言語へ翻訳する \_\_

願う、感謝する、ののしる、挨拶する、祈る \_\_

(『探求』第23節)

以上から、言語ゲームにはかなり多くの種類があることが見て取れる。『探求』における語りえないものを明らかにするためには、これらの共通項を見出さなければならないと考えるかもしれない。しかし、小話を作り、語ることと計算の応用問題を解くことに何かしらの共通点はあるのか、ののしることと、謎を解くことの間になにかしら欠くことのできないものが見出せるのであろうか。小話の中にもものしりがあり、そこには情念が欠かせないと言われうる。しかし計算に感情は欠かせないのか、電卓に感情が欠かせないか、と問われれば、否定せざるをえない。我々は言語ゲームの本質を見失い、途方にくれるかもしれない。

ここで「家族的類似性(Familienähnlichkeit)」という概念が導入される。たとえば「ゲーム(Spiel)」と呼ばれるものでもボードゲーム、カードゲームやボール遊びもある。勝敗が分かれているものも、そうでないものも見られる。一見ある種の「共通項」が見られないかもしれないが、「我々はそのに、相互に重なり合い交差し合う種々の-そして、大きな或いは小さな-類似性の、複雑な網状組織を見るのである」(『探求』第66節)と語られる通り、類似性を見出すことはできる。上に挙げた言語ゲームにもまた、家族的類似性が見られる。

言語ゲームというものは類似性に基づいて言語ゲームと呼ばれる。明確に定義できずとも、我々は言語ゲームと呼ばれるものに関わる中で実際に様々な事項を取り扱うことができる。つまり、たとえ言語ゲームの「本質」から探求』

第2節のように用法の例を記述することは可能である。ある語の意味を調べたいのであれば、それが言語ゲームでどのように扱われるか、記述することが『探求』において重要なのである。

### 3.3 『探求』における語りえないもの

今、冒頭で提示した二つの問いについて検討することができるであろう。『探求』の言語観において『論考』における「語りえないもの」とはどのように扱われうるのか。そして、言語ゲームという観点からは「語りえないもの」はいかなるものであるのか。本稿はこれらの問いに答えるために、言語ゲームという概念がどのように使われるべきかを記す。

『探求』では、言語ゲームを記述することにより、A という語の用法が注目され、いかなる文脈や状況で A という語が使用されるかが指摘される。これは、「語りえないもの」についても同様である。1.2 の議論から、『論考』における語りえないものは無意義やナンセンスという形態を取る。したがって、『論考』における語りえないものが『探求』においていかに扱われうるかは、『論考』における無意義やナンセンスが言語ゲームにおいて関わる行為の役割と能力を究明することにより明らかになるであろう。

そこで、「哲学者の仕事は、或る特定の目的のために、言語ゲームについての記憶を集め揃えることである」（『探求』第127節）とあるように、そのような言語ゲームを想定し「なぜこのような語を使用するのか」について考察を深めることにより、無意義やナンセンスが『探求』でいかに語られるかが明らかになる。こうして、『論考』を『探求』がどのようにして乗り越えているかが示されるであろう。

さらに、『探求』において何かを語ることが、言語ゲームにおいて語を使用することであれば、言語ゲームにおいて語を使用しないことが何も語らないこととなる。すると、『探求』における語りえないものは、言語ゲームで語とし

で使用されえないのである。言語ゲームにおいて使用されないとはどういうことであるのか、という問いに答えていく中で、『論考』を『探求』がどれほど乗り越えているかが示される。

## 結

本稿は『探求』の意義をより明確にするために、『論考』を『探求』がどのようにして乗り越えているか、そしてどれほど乗り越えているかを究明するために必要な問いを立てた。まず、いかにして乗り越えているかを究明するために、『論考』における無意義とナンセンスが言語ゲームにおいてどのように使用されるか、という問いが立てられた。そして、どれほど乗り越えているかを究明するために、『探求』における語りえないもの、つまり語として使用されないものが何であるか、という問いが立てられた。

しかし、本稿は両者の問いに具体的な解答を与えるまでに至らなかった。今後の課題として、『論考』を『探求』がいかにして乗り越えているかを検討するために、『論考』における無意義とナンセンスが用いられた言語ゲームを想定し、無意義とナンセンスが『探求』においてどのように捉えられるか議論する必要がある。

また、どれほど乗り越えているかを検討するために、言語ゲームが成立しないもの、つまり語が使用されず、言語として行為に織り込まれないものを明らかにせねばならない。そのためには、言語だけでなく理解すること、命令すること、発話することなどの行為がどれほど自身の役割を担えるかも検討する必要があるであろう。

### 参考文献

- Ludwig Wittgenstein, 2009, Logisch-Philosophische Abhandlung Tractatus logico-philosophicus, Suhrkamp Verlag GmbH, , 2003 (『論理哲学論考』, 奥雅博訳, 1975, 『ヴィトゲンシュタイン全集 1』, 大修館書店, 野矢茂樹訳, 『論理哲学論考』, 岩波書店)
- Ludwig Wittgenstein, 2010, Philosophische Untersuchungen, Suhrkamp Verlag AG (『ウィトゲンシュタイン『哲学的探求』 第1部・読解』, 1994, 黒崎宏訳, 産業図書)
- 鬼界彰夫, 2003, 『ウィトゲンシュタインはこう考えた 哲学的思考の全軌跡 1912-1951』, 講談社
- 鬼界彰夫, 2018, 『ウィトゲンシュタイン『哲学探求』を読む① 『哲学探究』とはいかなる書物か—理想と哲学』, 勁草書房
- 末木剛博, 1976, 『ウィトゲンシュタイン論理哲学論考の研究I 解釈編』, 公論社
- 野矢茂樹, 2006, 『「論理哲学論考」を読む』, 筑摩書房



註

- <sup>1</sup> 本稿は2019年度哲学若手研究者フォーラムにおける筆者の口頭発表「「ツルツルした氷」から「ザラザラした大地」へー『論理哲学論考』を離れ『哲学的探求』に伏す語りえないものー」を基に作成したものである。フォーラム運営委員の方々、また当日の司会を受けていただいた槇野沙央理氏にはこの場を借りて御礼申し上げる。
- <sup>2</sup> 本稿では黒崎訳を主に参照するため、『哲学的探求』と表記する。
- <sup>3</sup> 本稿では奥訳を中心に、訳語の選定に際し適宜野矢訳を参照する。
- <sup>4</sup> 末木(1976) p.16
- <sup>5</sup> 鬼界(2003) p.246
- <sup>6</sup> 命題も文も、ドイツ語では'Satz'であるが、『論考』では真偽判定がなされる命題、『探求』では日常言語において役割を与えられる文と通例訳される。本稿もそれに準ずる。
- <sup>7</sup> 鬼界(2003) p.246,247
- <sup>8</sup> 鬼界(2018) p.12
- <sup>9</sup> 鬼界(2018)p.10,11
- <sup>10</sup> 'sinnlos'は、奥訳では「意義を欠いたもの」である。しかし本稿は'sinnlos'が「一定の記号体系に属する」(四・四六一)ことを指摘しているため、「有意義(sinnvoll)」における記号的性格ではなく意義のみを失っているものとして「無意義」と訳す。
- <sup>11</sup> 「無意義」との違いを表すため、野矢訳「ナンセンス」を参照。
- <sup>12</sup> 藤本訳では「同語反復」、野矢訳では「トートロジー」となっていたが、これら二つの訳語よりも「aはa」以外の矛盾律などを表しやすい「恒真式」と本稿では訳す。
- <sup>13</sup> 奥訳で'Bedeutung'は「意味」と訳されるが、'bedeuten'の「指し示す」という訳に力点を置いて「指示対象」と書く。
- <sup>14</sup> 独語は'geordnet'。藤本訳では「順調である」と訳されているが、「アприオリな秩序」との関連性を強調するため、「秩序づけられている」と訳す。
- <sup>15</sup> 野矢(2006)p.361,362
- <sup>16</sup> 野矢(2006)p.361,362